アーティスト・イン・レジデンス2005
珍しいキノコ舞踊団「テーブルの周りで。」公演風景
2005年12月13日　東北芸術工科大学本館インフォメーション・パッサージュ
Photo by Haruko Miura

珍しいキノコ舞踊団

アーティスト・イン・レジデンスとは、国内外からアーティストを一定期間招聘して、滞在中の活動を支援する事業です。アーティストは、スタジオを公開したり、ワークショップを行うなど、自らの活動を地域に公開することが求められ、鑑賞者はこれらのプログラムによって、作品と見る側という一方通行の関係では味わえない双方向の交流を持つことができます。

美術館大学構想室が企画する第一回目のアーティスト・イン・レジデンスには、ダンス・カンパニー『珍しいキノコ舞踊団』を招聘しました。様々な角度からダンスを捉え、その作品の発表を通してオリジナリティーの確立を目指す彼女たちは、劇場空間での上演のほか、美術館、ギャラリー、カフェ、オフィス、倉庫など、大きさや形態も異なる空間での公演も積極的に行っています。

十二月九日～十四日までの滞在中は、学生ボランティアのサポートのもと、こども芸術大学で「自分の居場所探し」をテーマとする新作ダンスの振り付けを公開したり、学内各所でゲリラ的なダンス・パフォーマンスを敢行。滞在最終日に学生食堂で発表されたダンス『テーブルの周りで。』は約三〇〇名が鑑賞し、色鮮やかな舞台美術とコミカルなダンスが、雪に包まれた芸工大キャンパスを湧かせました。

珍しいキノコ舞踊団

様々な空間で立ち上がるダンスを観客とともに体験し、それぞれの場所、それぞれの身体がもっているダンスを探り、楽しむ。団体の活動は多岐にわたり、新作公演を軸に国内地方都市でのツアー公演、海外公演、他団体（演劇・コンサート・映画など）への振付・出演、ワークショップ、映像製作なども行っている。代表作「フリル（ミニ）」（日本舞踊批評家協会新人賞、千年文化芸術祭特別賞、日本インターネット演劇大賞受賞作品）は、国内のみならず、フランス、ニューヨーク、インド、タイでも上演された。

「FLOWERPICKING」（二〇〇二年びわ湖ホール／二〇〇四年東京CLASKA）は、八月にストックホルムの野外劇場で上演され、二日間で七千人を動員し大好評を博した。

URL: http/www.strangekinoko.com/

会期：2005年12月9日［金］～12月14日［水］
滞在期間：2005年12月8日［木］～12月15日［木］
招聘：珍しいキノコ舞踊団
（主宰：伊藤千枝／ダンサー：井出雅子・山田郷美・佐藤昌代・篠崎芽美）
企画：美術館大学構想室

●公開練習
場所：こども芸術教育研究センターこども劇場
会期：12月9［金］、10［土］、12［月］
時間：15:00 ～ 17:00

●ダンスパフォーマンス
『テーブルの周りで。』
第１回：インフォメーション・パッサージュ
日時：12月13日［火］17:00 ～ 17:20
第２回：学生食堂
日時：12月14日［水］17:00 ～ 17:20

学生ボランティアレポート

01

千坂彩
美術史・文化財保存修復学科1年

―こども大学で公開練習 キノコダンスを見る―

珍しいキノコ舞踊団。あるときは路上パフォーマー、あるときは舞台ダンサー、あるときはワークショップインストラクター。あらゆる場であらゆる人にイマジネーションを提供し、ダンスの楽しさを伝えてゆくパワフルな女性ダンサー七名。スタッフを合わせると十五名ほどのダンスカンパニーだ。

十二月初旬、そのうちのダンサー五名、音響・舞台セッティングスタッフ一名が、ここ東北芸術工科大学に招かれた。

三年前から着手されている美術館大学構想。その一企画アーティスト・イン・レジデンスは国内外で活躍するアーティストを学内に招いて活動の支援、場の提供をすると共に、学生はアーティストが作品を創作してゆく最も近い場所で、その仕事に触れることができるという双方の刺激を目的とした企画だ。そもそもアートパフォーマンスは、この山形の地ではなかなか体験することができない。今回の珍しいキノコ舞踊団来学は、記念すべき第一回目。そして後々には授業の一環として、彼女たちの「ダンス」と学生たちの「作品」をコラボレーションするという企画の先駆けでもあった。

滞在期間約一週。その間に三日間の公開練習と二日間の本番公演。この企画の特に面白いところは、実はキノコのメンバーにとっても初めての試みだったという公開練習だ。観客が劇の幕内に好奇心を寄せるように、アーティストが作品を制作していく過程も同様、好奇心を掻き立てられる。今回それまでも覗き見られるという。

会場はこども芸術大学円形劇場。壁伝いに椅子が並べられ、設けられた客席。個人的な感想になってしまうのだが、日常空間に溶け込んだダンスを想像していた分、その整然と椅子が並べられた空間に少々違和感を感じた。見学者は連日、用意された椅子がほとんど埋まるくらい見学に来ていたが、空間設定によるものか、慣れない企画のためだろうか、好奇心というよりは神妙に様子見という雰囲気が漂っていた。しかし、その雰囲気も彼女たちが練習に没頭していくにつれ薄らいでしまった。練習とはいえ、彼女たちの不思議な一挙一動に惹きつけられる。どこまでも終わり無く繋がっていく動き。それは日常生活のどこかで目にする動きから始まり、非日常的で思いもよらない不思議な動きに展開されていく。その動きを既存の言葉に当てはめるのは難しい。どこからが練習でどこからが休憩か判別がつかないほど彼女たちは常にダンスを纏っている。特に子どもの反応は素直だった。陽気な曲が流れ陽気な動きをすれば食い入るように見、楽しそうに笑顔を浮かべる。学生はというと、自らの創作活動に生かせるものは少しでも吸収するかのように始終真剣な面持ちである。観客がアーティストから作品を介して受け取ることができる感動、刺激はたくさんある。しかしアーティストが自分たちから何を受け取って、どう思ったかまで感じ取るのは難しい。

公開練習最終日。その日は一畳ほどの楽しそうに遊ぶ母子のラフ画が劇場の壁面にずらりと掲げられ、一変した雰囲気の中行われた。こども芸術大学のワークショップに参加した母親と学生スタッフが制作したものである。心なしか前日より明るく軽やかな空気を感じる。練習の中盤、リズムのいい曲に合わせて小刻みに体勢を変えていくパートの時である。ダンサーの動きが掲げられた絵とダブって見えた。そして休憩中の会話。「私あの格好真似してみた」「私も。あれが可愛かったから」という声が聞こえてきた。今は観客となっている人たちからアーティストがインスピレーションを得、表現に取り入れる。とても些細なことかもしれないが、はっきりとした相関関係を感じた瞬間だ。作品を創っているのが人ならばそれを観るのも人。ただ作品を見るだけではなく、こちらからアクションを起こせば向こうも何らかの反応を返してくれるという当たり前のコミュニケーション。その「当たり前」が完成した作品のみを観ていると忘れてしまう。公開練習はダンスの練習過程を見るというだけではなく、アーティストと観客の相関関係を知るというとても重要な意味を持っている。彼女たちの練習現場を観て本番を観た人は、本番だけでは感じることの出来ない親近感を感じることができたのではないだろうか。

02

丹尾由希菜
美術史・文化財保存修復学科1年

―インフォメーション・パッサージュでの公演―

三日間の公開練習を終えた「珍しいキノコ舞

Photo by Haruko Miura

珍しいキノコ舞踊団公開練習
2005 年 12 月 9 日　こども芸術教育研究センターこども劇場

踊団」。十二月十三日には芸工大本館インフォメーション・パッサージュにて彼女達のダンスパフォーマンスが行われた。今回はステージと観客席というスタイルではなく、学生たちが普段通行する人通りの多い場所に紛れ、気付いたらそこで女性たちのダンスが繰り広げられているという「空間との同化」を求めた。そのため予告のポスターやパンフレットでは開催場所が学内某所と秘密にされていたのだが、通路の中央に突如設置された「珍しいテーブル」を見つけて立ち止まる人は後を絶たず。観衆は「これからどんなパフォーマンスが始まるのか」と、興味津々の顔でセットに注目していた。

今回のパフォーマンス「テーブルの周りで。」は二〇〇四年にストックホルムのトーキョー・スタイル・イン・ストックホルム二〇〇四で、また目黒のホテルで行われたダンス「FLOWER PICKING」の一部であり、ダンスの冒頭部分を今回の公演に用いた。まずは、お茶を飲むという何気ない日常的行動からダンスへ発展していく「ダンスの楽しさ」を芸工大の人々に伝えたかったのだそうだ。

女の子らしいファッションで登場した女性たちが、六人がけのテーブルを囲みお茶を飲みながらおしゃべりを始める。やがて茶器を頭や体に乗せて遊び始め、さらには茶器や椅子をふざけて取り合ったりとコミカルな動きが続き、中にはダンサーの動きを追うがために必死で首を動かす鑑賞者も見受けられた。またBGMでラテン・中華風・スイングジャズなど曲が転換するごとに、彼女達のダンスも変化していく。テーブルの上に乗りソロでダンスをしていることもあれば、二人でペアになって踊ったり、五人全員で同じ動きをしたり…。一見何を表現しているのだろうと思う不思議な、しかしどこか可愛らしいダンスが展開されていく。踊りながら観衆へ寄って行き、まるで話しかけるように笑顔を近づけたり、腕を動かしながら鑑賞者に手を差し出すようなしぐさが、観衆を彼女達独自のダンスの世界へ導いているようで印象的だった。徐々に縮まっていくダンサーと鑑賞者の距離には、限られたセットの狭い空間の効果を見出すこともできる。

また、前日までの公開練習も拝見していたのだが、同じダンスでも見る度にアドリブや動きが微妙に変化しているように思え、その時その時の彼女たちの心情を垣間見ることで、常に新鮮な気持ちでダンスを観られる面白さを発見した。そして練習の時の和やかさとはまったく違う、顔から指先まで神経が行き届くような張り詰めた緊張感が伝わってきて、本番で初めて味わうダンスの楽しさや喜びも感じとることができた。

冷えた空間でダンスをするというのに、半袖やノースリーブの可愛らしい軽装、ダンサーそれぞれが型にこだわらず自由に動き表現するダンス、そして体を動かすことで上昇する体温と呼吸数。雪で冷え切った山形という地で、このようなキノコ舞踊団の姿を目にした鑑賞者の中には、大きな衝撃を受けた人もいるのではないだろうか。それと同時に、次の日の同学で行われるパフォーマンスも見たいという欲求にかられた人は多かったと推測する。

右頁：「テーブルの周りで。」公演風景
2005年12月14日　東北芸術工科大学学生食堂

03

渡辺晃子
美術史・文化財保存修復学科1年

―学生食堂での公演―

十二月十四日、〈珍しいキノコ舞踊団〉のダンスパフォーマンスもとうとう最終日を迎えた。

今回の舞台は芸工大の学生食堂の一階。ボランティアスタッフはこの日のために約一週間前から学食一階にのぼりとダンスの映像を流すDVDを設置し宣伝してきた。

当日の午後、学食の机と椅子を動かして会場作り。学食の中央に舞台装置の机と椅子がセットされた。前日のパフォーマンスでは、大学の通路に突然現れたテーブルと椅子が唐突な感じがしていたものの、今回は日常の空間と舞台とが調和していたように感じられた。日常の空間で立ち上がる非日常的なダンスを、観客も一緒になって体験

し、楽しんで欲しいと望む彼女たちの舞台によりふさわしいものだったと思う。

当日の学食のメニューに「キノコスパゲティー」を加えるという遊び心のある演出の効果か、それとも昨日のインフォメーション・パッサージュでのパフォーマンスの効果であろうか、今回の公演に対する認知度は上がっているようで、公演の時間が近づくにつれて、見物客は増えていった。観客の殆どが本学の学生のようだったが、中には親子連れなど、学外からやってきたとみられる人も多かった。人の群れがまた人を呼び、最終的には三〇〇人近い人があつまっていた。

そうして始まったダンスパフォーマンス。ダンサーたちが学食の二階の控え室から階段で降りてくる。既にパフォーマンスは始まっているようだ。観客は早速意表をつかれたようで、学食で休憩しようとしていた学生は、なにがなんだかわからないといった様子だった。舞台装置の椅子に座ってくつろぐダンサーたち…と思うとその動きが少しずつダンスへと変化していく。戸惑っていた観客も次第に彼女たちのダンスに引き込まれていく。ダンスを見に来たわけではない人も、おしゃべりを止めて彼女たちのダンスに見入る。ダンスを見ながら真剣にメモをとる姿も見られるほどだった。

ダンスが無事終わると、ダンサーたちは学食のエレベーターに乗り二階へと去っていった。しかし彼女たちがいなくなった後も拍手は鳴り止むことなく、それは誰からともなくアンコールの手拍子へと変わっていった。パフォーマンスがこれほど盛り上がることはボランティアスタッフにとっても予想外の出来事で、正直に言うと困ってしまった。けれど学芸員の宮本さんが急いでダンサーたちを会場に呼び戻し、彼女たちがアドリブでテーブルの上でポーズを決めて、ようやく今回のパフォーマンスは終了した。「すごいね」「かわいい」興奮した話し声があちこちから聞こえていた。

「かわいい」と「滑稽」、「美しい」と「奇妙」は案外隣り合わせに存在するのかもしれない。キノコのパフォーマンスのお茶を飲むという何気ない日常的光景がダンスへと変化していく情景、そして日常と非日常の間で繰り広げられる動きは私たちのこれまでのダンスのイメージをまったく覆すものだった。しかし、学生たちはキノコのダンスを肯定的に受け入れた。

キノコのダンスは、なんでもないような日常の動きのようでありながら、美しく、人を惹きつける魅力のあるものだった。私は今回のパフォーマンスを鑑賞することで、美しいものは日常のなかに潜んでいて、それを発掘することができるかどうかは自分次第なのかもしれない、そんなことを考えさせられた。芸術活動に必要なのは、なんでもないようなものの魅力に気付き、こころをふるわせることなのではないだろうか。彼女たちのダンスが芸工大の学生にとって良い刺激になったことを期待する。

今回のパフォーマンスで惜しかった点を挙げるなら、それは舞台の周りにキレイに並べられた椅子が、「舞台」と「客席」との距離を隔てていたように感じられたことだ。キノコが学食の空間となじむような舞台装置を準備していたのに、「客席」を作って彼女たちと観客の間に壁をつくるような準備をしてしまったのは、私たちの理解不足だったと思う。

しかし十二月十四日の学生食堂に、珍しいキノコ舞踊団のパフォーマンスによって普段とは違った緊張感のある空気が流れ、これまでにない盛り上がりを見せていたことは確かである。人の価値観はそれぞれ違っていて、自分が美しいと感じるものを、ほかの人がおなじように美しいと感じるとは限らない。けれどあの空間にいた人々は「美しい・おもしろい」という感情で通じ合えていたように思う。

また、観客の中には、新聞を見てパフォーマンスを見にやって来た地元の人もいた。今後も芸工大にアーティストが来ることがあるなら、情報を伝えて欲しいとのことだ。今回のイベントが芸工大の学生だけの盛り上がりではなく、地域の人も巻き込んで成功したという事実を喜ばしく感じる。今回のダンスパフォーマンスは、芸工大の存在が山形の芸術活動を活性化させる一歩となったとも言えるのではないだろうか。

Photo by Haruko Miura